



川と人

VOL. 3
1993

CONTENTS

Cover Poem

幻想天の河／原子 修 ————— 1

石狩川名所めぐり

富良野市 北海道の秘境と言われる大雪山連峰。富良野岳の花園「原始ヶ原」。—— 2

札幌市 大都会のほとりに佇む、大自然のステージ「国営滝野すずらん丘陵公園」。—— 3

History 森田義育

「河川通信」に見る歴史の一駒 ————— 4~7

ミシシッピ川紀行 中編

北海道開発局 船木淳悟 ————— 8・9

流域市町村の紹介

恵庭市 浸水から親水へ ————— 10

沼田町 川に感謝して川を生かすまちづくり ————— 11

河川ピックス

平成5年度「全国森と湖に親しむつどい」開催報告 ————— 12

平成5年北海道南西沖地震「後志利別川・尻別川」の被災報告 ————— 13

北海道の川づくり

暮らしを潤す、自然豊かな「川づくり」へ ————— 14・15

札幌市の川づくり

都市小河川改修事業 安春川改修工事 ————— 16

州を活かした町づくり 後編

埼玉県/栗橋町 渡良瀬遊水地アクリメーションランド構想 ————— 17

河川事業の紹介

平成5年の北海道開発局における治水事業 ————— 18・19

石狩川振興財団の活動報告

親水体験親子バスツアー(石狩川上流) ————— 20・21

「川の科学館オープン」 ————— 22

編集後記 ————— 27

幻想天の河 原子修

「イシカリペツは幻想天の河
光の乳で

北の大地をうるおし

緑の森をやしなう

イシカリペツは幻想天の河

ロマン水で銀の魚をふとらせ

星座の鳥をそだてる

イシカリペツは幻想天の河

宇宙の愛で

人の心をひろくし

いのちの夢をつちかう」

童話風ロマン「幻想天の河まつり」より

北海道の秘境と言われる大雪山連峰。 富良野岳の花園「原始ヶ原」。

その美しさは人々の心を魅了し、
時の流れを忘れさせる。

大雪山国立公園の最南端、噴煙たなびく十勝岳と接して立つ秀峰富良野岳(1,912m)。テレビドラマ「北の国から」の放映で、いまも多くの観光客が雄大な自然を求めて訪れる麓郷地区から、布部川の清流をたどり逆上っていくこと約3時間。富良野岳中腹に大雪山系中唯一の高層湿原「原始ヶ原」が広がっています。

およそ1,000ヘクタールにも及ぶこの湿原には背丈1mで樹齢300年の年輪を刻む赤エゾマツや初夏には一面に珍しい高山植物が咲き乱れる花畑は、正に秘境の地さながらです。この「原始ヶ原」に向かう途中の溪流ルートには風光明媚な8つの滝があります。下からみればいかにも天に昇るかのような蒼天の滝、優雅な姿が特徴の昇竜の滝、不動の滝等、毎年6月下旬に開かれている「原始ヶ原登山会」には人々の目を楽しませてくれる自然の宝庫として多くの市民が滝コースを目当てに訪れ、登山やハイキングに最適なコースとして親しまれています。

富良野岳に源を発する山水は豊かな水量となつて人々に潤いをもたらし、春のツツジや秋の紅葉など四季を通じての溪流美は人々を魅了し、自然を満喫させてくれるでしょう。



▲富良野岳

富良野市 「原始ヶ原」



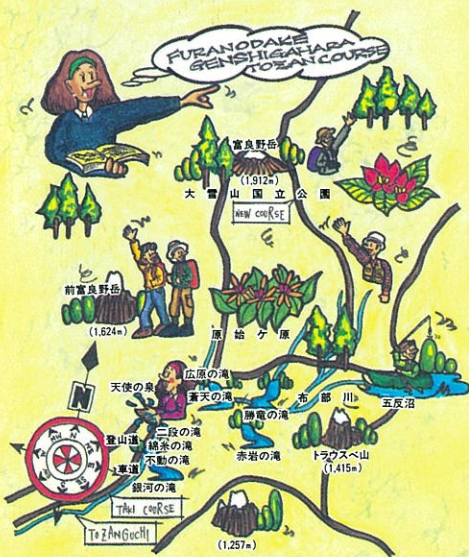
▶ 広原の滝

▶ 蒼天の滝



▲原始ヶ原

富良野岳「原始ヶ原」登山コース



◀市役所屋上から見た大雪山連峰



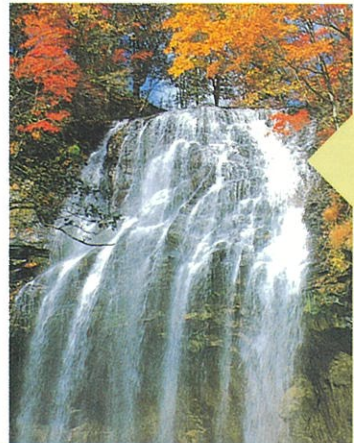
豊かな自然と多彩なプランを有する 北海道唯一の国営公園。

札幌市の中心部から南へ18km、車で約30分ほどの札幌市南区滝野地区に位置する国営滝野すずらん丘陵公園は、昭和53年から整備が進められ、現在は約1100ヘクタール、全体の1/4が市民の憩いの場として開放されています。

総面積395.7ヘクタールに及ぶ公園敷地内は、緩やかな丘陵地に広がる森をはじめ、開園区域を縦貫するように流れる厚別川、水清らかな鱒見の沢、中の沢、野牛沢、清水沢等の河川、さらに日本の滝100選に選ばれた落差約30mの「アシリベツの滝」、女性的な美しさを誇る「鱒見の滝」、「白帆の滝」、「不老の滝」など、恵まれた自然資源を有しています。このように公園が川を主体とした自然環境となっているため、カワガラス、オオルリ、キセキレイ等の溪流沿いに生活する野鳥が多く見受けられるほか植物も豊富で、フクジュソウ、ミズバショウをはじめとする約300種類の野草と約130種の樹木が確認されています。

敷地内は「溪流ゾーン」、「中心ゾーン」、「宿泊ゾーン」、「森林スポーツゾーン」、「自然観察ゾーン」、「保全ゾーン」の6つのエリアにゾーニングされ、「自然とのふれあい」

大都会のほとりに佇む、大自然のステージ、 国営滝野すずらん丘陵公園。



▲アシリベツの滝と紅葉

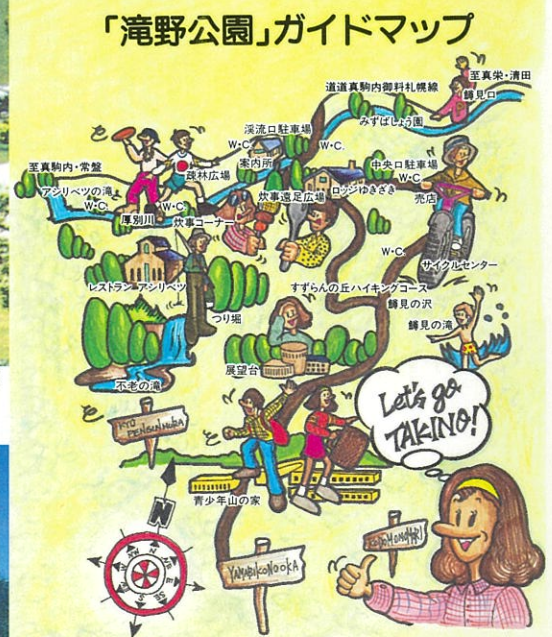
札幌市

「滝野すずらん 丘陵公園」

をテーマに整備が進められています。すでに「青少年山の家」などがオープンし、さまざまな野外教育活動の基地として利用されており、平成6年には充実した管理運営体制のオートキャンプ場「オートリゾート滝野」もオープンの予定です。



▲滝野パークブリッジ

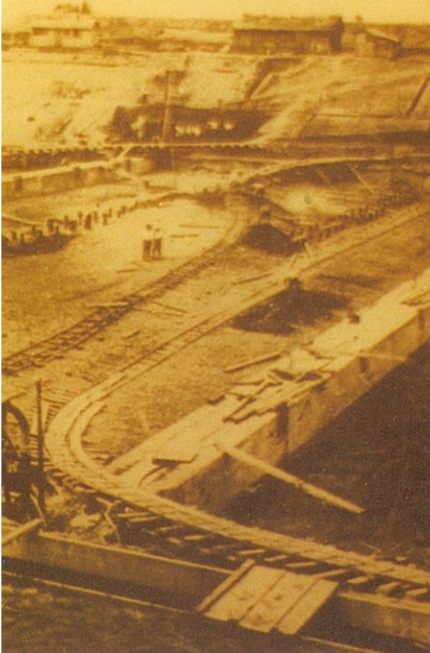


▲歩くスキー大会



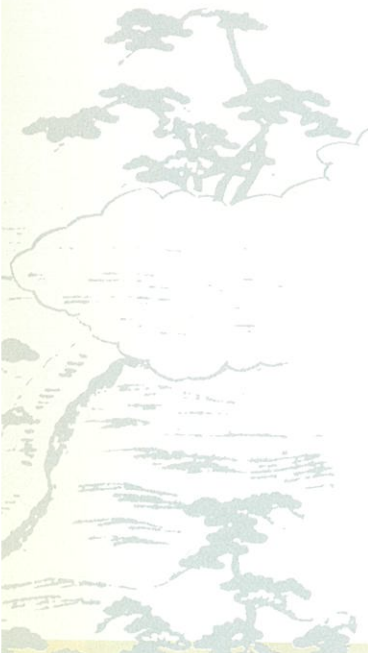
▲溪流園





『河川通信』に見る 歴史の一駒

(株)建設維持管理センター取締役
森田義育

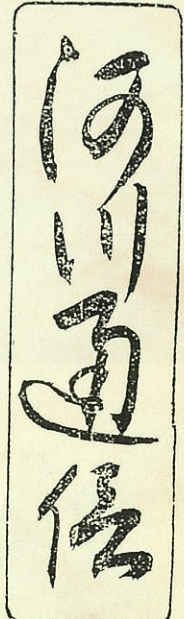


『河川通信』なる古い新聞が発見された。昭和九年五月の発刊になるもので、発行者は北海道庁土木部河港課とある。(当時は河川課と港灣課が一緒であつて、夫々独立した課となつたのは昭和一二年の春であつた)

その発刊第一号は次のような体裁になつており(資料一)、冒頭には当時の河港課長の発刊の辞が載っているが、当時の時代背景を窺い知ることが出来て興味深い。辞の末尾に書かれているように、この通信は保護組合乃至は愛護会等、広く民間の協力を得る目的をも兼ねていたもので単なる部内通信ではなかつた。

(資料一)

1 第一号 河川通信 昭和九年五月十五日發行



發刊の辭

河港課長

第一號

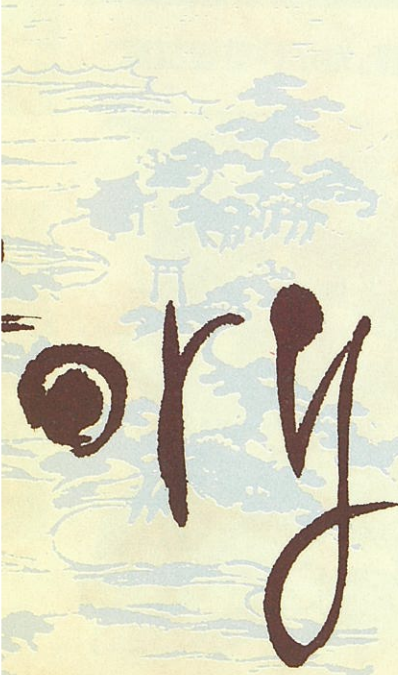
人間は時々小恩に感激する一方屢々大恩を忘却する様な矛盾がある誰れにも有勝な忘恩は空氣に水に對してである、人間生れ落ちて産湯の水から死ぬべきの末期の水に至るまで水なくては生存が一時も保たれないのである。

水は直接生存上の必需品たるのみならず、一切の食料は水によつて供給せらる、米穀、菜豆は云ふに及ばず、魚も肉も皆水あるが故に出来るのである、尙推し廣めて考へて見ると、家屋の用材も衣服の原料も水があるが故に出来るものである、斯様に考へると人間衣食住皆水のお蔭と云はねばならぬ。

この廣大無邊な恩恵を與へる水は天から降つて来る雨が其源で、これが潜つては地下水となり、流れては河となり、あらゆる生物を養ひつゝ、餘つた餘力は水力電氣となり運輸の通路となる、考へて見れば一滴の水も勿体なくて粗末にはならぬ。それを水と云へば無代價即ちタダのもの、代表とし河と云へば洪水の慘虐をのみ連想する、これではならぬ水に對しては眞に感謝の念を以て眺め其流路に對しては出来るだけ保護愛撫の念を以て隔まねばならぬ、これが即ち洪水の慘虐から免れる唯一無二の方法である。

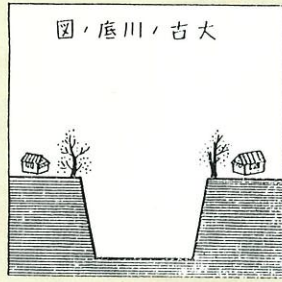
この感念の形に表はれたものは水源の涵養、護岸の整理、堤防の築造等である、これは獨り國の力、官の處置にのみ依頼すべきでなく各人各様に各々其分に應じて力を致すべきである、河川保護組合或は河川愛護會皆この感念から生れたもので近來この主旨がよく徹底し組合員各自の自覺となり各地で種々なる活動を見るに至つたのは眞に嬉ばしいことである、また王子製紙、北海水力、北海道電燈、北海道炭礦汽船、栗林商船其他有力な會社個人等より多額の金品を寄附せられ最も理解ある後援を受けたので吾々の活動も一段の馬力を加へ得る様になつた次第である。

この通信は河川保護組合或は河川愛護會活動の状況を組合員に知らせんが爲めに刊行したもので今後續々と華々しい活動の状況を報告し得ることを期待し、各組合の一段の活動を望んで發刊の辭といたします。

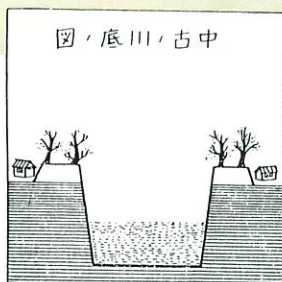




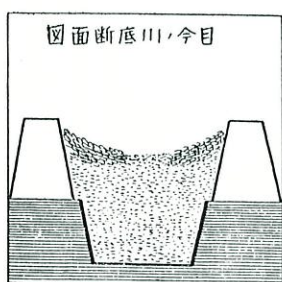
(資料四)



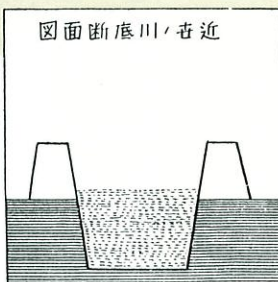
第一圖
平地より數十尺底くき地の下を流れて洪水平地に溢れることなき圖



第二圖
土砂川底を埋めり故に洪水平地に溢り溢るゝ因て堤防を築きて是を防ぐ圖



第四圖
今日の川底は近世の川底の上にありて危険となりたる圖



第三圖
川底埋り洪水堤防の上に溢るゝ場合となりたる圖



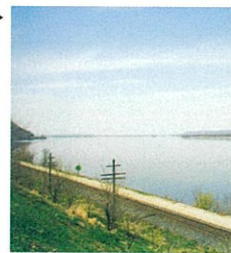
第五圖
淀城へ淀川の水を汲入たる水車大正十七年より昭和三年まで二百九十三年間に水車二十四尺切り縮めたる圖

▲生振捷水路通水後の縮切工事 昭和6年

石狩川乃至は北海道の河川と直接関わりのあることではないが、昭和十年五月発行の第十一号に、内地河川を例にとつた「河底の上昇」所謂天井川について次のような図示がある(資料四)。特に第五図に示された「淀城」(大阪城)のことであろうか)の水車の話は面白いので敢えて紹介する。



▲夕張川新水路通水 昭和11年5月



ペビン村付近のミシシッピ川は、河道が広くペビン湖と呼ばれている

ミシシッピ川紀行(中編)

アメリカ全土の約35%を占め、様々なドラマを生み続ける大河ミシシッピ。水源地であるイタスカ湖から始まった旅の第2回目は、大河の恩恵を受けながらも、全く違った表情をみせる街々を紹介しします。

北海道開発局 船木 淳悟

ペビン

大草原の小さな田舎町
ミネアポリスを過ぎたあたりから川はミネソタ州とウイスコンシン州との州境を形成する。この隣り合う2つの州はいずれも農



▲ミス・ローラ

▲ローラの家

業立州でありながら、その景観は驚くほど違っている。ミネソタ州はトウモロコシや小麦畑が延々と続くアメリカでも指折りの穀倉地帯で、季節とともに、茶色から緑、金色へとモザイク状に色を変えていき、その中に長さ500m以上はあろうかという、おぼけムカデのような巨大なスプリングラーが何匹もうごめいている。ウイスコンシン州はといえば、これまたアメリカを代表する酪農州で、見渡す限りの牧草地に、こちらも大きなバームクーヘンのように見えるヘイロールがごろごろ転がっている。

アメリカ人ならば子供の頃一度は読む『大草原の小さな家』の舞台となったのは、主にこの両州で、あちこちに一家の足跡がある。住んでいた家であったり、通った教会であったりするそれらのものは、こぞって観光資源となっており、そしてどこも同じように観光客の姿が目につく。アメリカ人にとってこのワイルダー一家の物語は、日本の『忠臣蔵』同様、アメリカ人の心をいたく揺さぶるものようだ。ミネアポリスからミシシッピ川に沿って車でおよそ2時間。ウイスコンシン州の片田舎に、この作者であり主人公であるローラ・インガルス・ワイルダーが生まれ



△ペビン村 ローラの日の祭

育った村、ペビンがある。訪ねたこの日、10月の最初の土曜日は彼女を記念した『ローラ・デー』で、村を挙げてのお祭りである。とはいっても、村人たちが手作りの籠飾りやブローチ、パンプキンパイなどを売るだけのいたって素朴なものである。

村の近くに彼女の生家があるというので行ってみた。草原や牧草地の中を走る道の端に矢印が延々と続く。10分も走った頃、それはまったくイメージ通り草原の中に立っていた。丸太造りの本当に小さな家である。中には彼女の写真や一家が移り住んだ場所を示す地図が貼ってある。そこにお祭りのために選ばれた、ミス・ローラがやってきた。こぢろはテレビドラマのローラのイメージそのものである。



ミシシッピ川ロマンチック街道 ミネアポリスから セントルイスへ

今から100年以上前、ミシシッピ川が物流の大動脈であった頃、その地理的有利な場所には多くの街が作られ、栄えた。それらは木材の積み出し港であったり、支川に向かうための宿場であったり、あるいはインディアンとの交易の場であったりした。ウイスコンシン、アイオワ、イリノイと続く中流部沿川には、ウイノナ、ダビューク、バーリントンなど、100年を優に越えるような古い建造物が建ち並ぶ街が続く。かつての繁栄を知るには難しくもない。街には活気に満ちた頃の名残を必死にとどめようとする博物館が必ずあるし、アンティーク・ショップが軒を連ねる。観光ずれしいない街を歩くのは大変気がいい。ミネアポリスからセントルイスへと続く1000kmに及ぶ川沿いの道は、まさに古き良き時代のアメリカにタイムスリップできるロマンチック街道である。



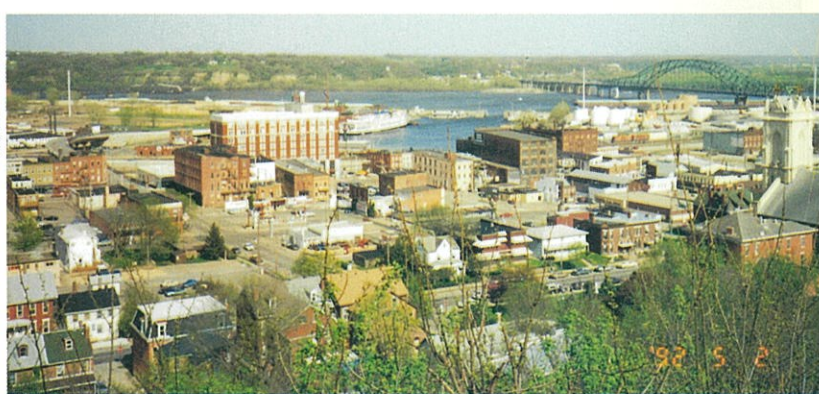
舟運から鉄道へ、そしてハイウェイへと物流の主体が移り、経済的發展から永く切り離されていたこの街々が最近再び息を吹き返えしつつあるという。カジノボート。大きなパドルを持った蒸気船に乗ってクルージングをしながらカジノを楽しむというものである。3時間程度のランチのみのクルージングもあるが、やはりメインは一昼夜かけてのカジノクルージングである。現在7、8隻のカジノボートが就航しており、沿川の比較的大きな街を母港にして毎日運航されている。元來娯樂の少ないこの地方では、このカジノボートが今後も増える気配である。一人あたりの掛け金の限度額が200ドルに制限されているからスッテンテンになることもない。持ち金がなくなれば、あとはゆったり食事をし、お酒を飲んでクルージングを楽しむ。家族連れや老夫婦の姿も目立った。

セントルイスより上流域における河川改修は、もっぱら航路確保に費やされてきたといっている。陸軍工兵隊による本格的な航路開設が始まった1800年代中ごろ以降、航行に必要な水深を安定的に確保するために、浚渫とダム・閘門の建設が次々とおこなわれた。現在、ミネアポリスからセントルイスまでの間は30基近くのダムが連なり、河口からミネアポリスまで一本の航路で結ばれている。

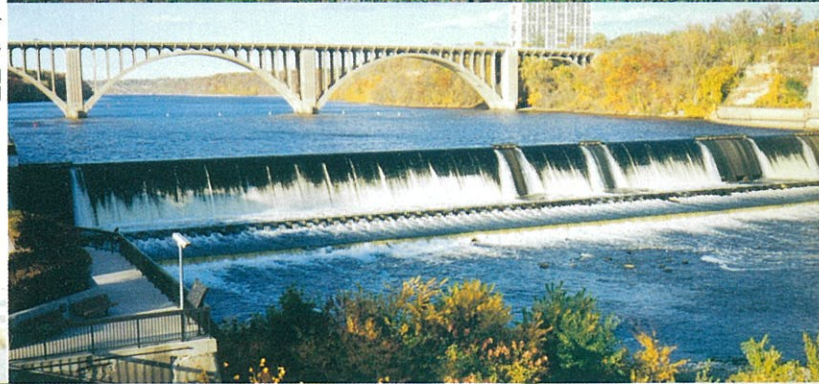
舟運による物資輸送の主なものは木材、穀物、石炭などである。川沿いには多くの火



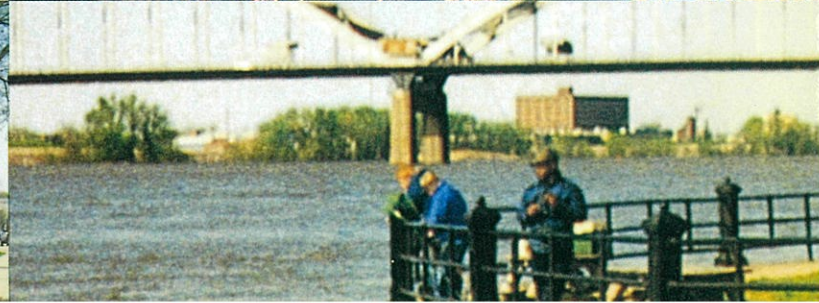
▲カジノボート ▲観光蒸気船



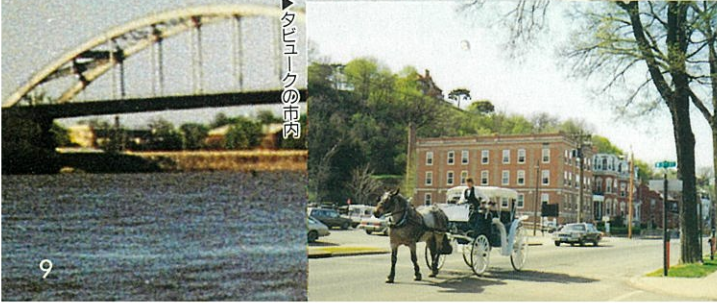
▲ダビュークの遠景



▲ダム・閘門



力発電所があることから、とくに石炭は重要物資である。一方、ダム・閘門の建設にともなって出現したダム湖は、ボートレジャーに格好の空間を提供している。河岸の入江には船着き場が整備され、週末になると多くのボートで賑わうが、最近ではボートどうしやボートと水泳をしている人との事故が多いという。閘門の操作も過密化してきている。環境上の問題もいくつかがあがたとえばダム湖への土砂堆積によって河岸の魚類の産卵域が湿地化し、野鳥の繁殖域の湿地が陸地化するという野生生物の生息環境の変化が問題化している。さらに船が引き起こす波による河岸侵食も無視できない問題になっているようである。それにしても、日本の河川の利用とは仕方も課題も随分異なるものである。



▲ダビュークの市内

先人たちの苦勞を礎に

恵庭の歴史、それは水との闘いでもあり、ました明治中期に山口、富山、石川、福井各県から入植した先人たちは、水害などで苦しめられた故郷に見切りをつけ、恵庭に新天地を求めて集団移住を致しました。しかし恵庭の地も千歳川、漁川などが氾濫する水害の常襲地帯であり、せっかく実った作物ばかりか家まで呑まれると言う大水害に見舞われ、再び水との闘いを強いられることとなったのであります。

その後、先人の幾多の苦勞を礎として、農林業と酪農のまちから基地のまちへ……：そして近代的な工業のまちへと戦後恵庭は大きく姿を変えていったのであります。まちの進展にあわせて河川の整備も進み、水の被害も軽減してきたかのように思われましたが昭和56年8月の集中豪雨による未曾有の大洪水により、その恐ろしさを思い知らされたのであります。抜本的な千歳川流域の洪



▲漁川夏まつり

流域市町村の紹介

恵庭市



▲茂漁川(ふるさとの川モデル事業認定河川)



浸水から親水へ。

水対策として、先人の苦勞に報いるためにも千歳川放水路の実現を3市3町の流域の人々と共に待ち望んでおります。

恵庭市には上流部に湊谷、中流部に市街地、下流部に肥沃な農地をなし恵庭の歴史をつくってきた母なる川「漁川」がまちの中央部を貫流しており、他に4本の河川が市内山岳丘陵地を源流として流れております。

川の「素顔」を活かして

「川」はあるときは神秘的な美しさを持ち、又あるときは狂った野獣のように猛々しい、大自然のドラマを演ずる創造主でもあります。その流れは清く、魅力ある水辺景観を呈し、良好な都市環境を作る主役でもあります。

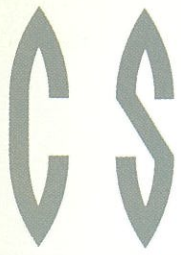
そこで恵庭市はこの苦惱の水を逆手にとり、市の総合計画の中に緑化施策として位置付け「水と緑のやすらぎプラン」を策定し、長期的な視点から市街地内外の諸機能を結び、網の目のように展開する道路と、河川空間を有効に活用し、緑のネットワーク作りを進めることにより市民の環境作りを始めたので



▲茂漁川ヤマメ稚魚放流

あります。主なものとして、母なる川、漁川は恵庭市の緑のネットワークの主軸をなすことから、種々の事業展開が図られており、国の制度であります「ラブリバー制度」や、桜づつみモデル事業などの指定を受け、パークゴルフ場や桜並木を創出すべく事業を実施しております。又道費河川「茂漁川」は国の制度であります「ふるさとの川モデル事業」の認定を受け「素顔の水辺づくり」をテーマとして、地域に残された自然を最大限に生かした河川改修を行う他、自然石を用いた緩傾斜護岸と植生など自然に優しい川の整備が図られ、そして河川周辺には市で公園を整備し市民の憩いの場となっております。

このように恵庭市は川との共存共栄を図りながら「活力とやすらぎ」のあるまちづくりを進めております。



太陽と森と湖の祭典 かなやま湖 湖水まつり

平成5年度

全国森と湖に親しむつどい

開催報告



▲地元混声合唱団による合唱



▲ウィンドサーフィン・カヌーレース大会

去る7月24日(土)・25日(日)、「森と湖に親しむつどい」が、空知郡南富良野町、かなやま湖畔キャンプ場周辺、金山ダムで開催されました。このつどいは、森と湖に親しむ旬間(7月21日～31日)の全国行事として行われたもので、人々に森と湖に親しむ機会を提供することによって、心身をリフレッシュし、明日への活力を養うとともに、森林やダム、河川等の重要性について関心を高め、理解を深めてもらうことを目的としたもので、各種のイベントが行われました。舞台となった南富良野町は、総面積の約90%が山林原野で、中央部に9.2kmの長形の湖“かなやま湖(金山ダム)”があり、湖の周辺には、キャンプ場、保養センターなどがある、すぐれた自然環境を有する町です。

カヌーレース大会、郷土芸能、地元混声合唱団の合唱などのほか、24日には山川豊、島津亜矢、石上久美子出演の「森と湖の歌謡ショー」、25日には由紀さおり、安田祥子、菅原やすのり出演の「森と湖のコンサート」が行われ、訪れた人々は楽しいひとときを過ごしていました。また、福祉センターに於いては「みず・みどり・その未来を考える地域交流会議」も開催され、国民共有の財産である、水と緑の重要性を認識していたようでした。



シンボルマーク



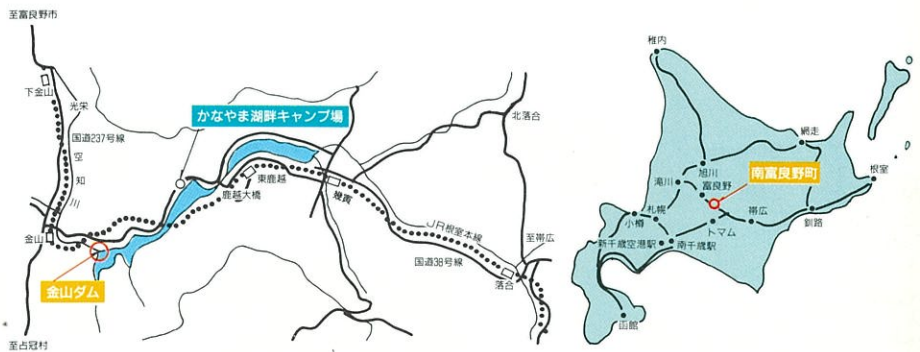
キャラクター

統一標語

「ふれあいさわやか 森と湖」
 「もうひとつ ふるさと見つけた 森と湖」
 「さわやかな 心のオアシス 森と湖」



▲「みず・みどりその未来を考える地域交流会議」



金山ダムの沿革と概要

- 昭和27年/予備調査着手
- 昭和34年/建設実施調査着手
- 昭和37年/建設事業着手
- 昭和38年/堤体コンクリート打設開始
- 昭和42年3月/湛水開始
- 昭和42年6月/竣工式
- 昭和42年7月/発電開始
- 昭和42年9月/竣工
- 昭和42年10月/金山ダム管理所発足

- 河川名/石狩川水系空知川
- 流域面積/470km²
- 地質/輝緑凝灰岩・輝緑岩

～平成5年 北海道南西沖地震(H5.7.12 PM10:17発生)～

後志利別川・尻別川の

被災報告

地震発生時間

平成5年7月12日
午後10時17分

震源地

奥尻島北方沖
約50キロメートル

震源の深さ

34キロ程度 M7.8

被災地

北海道南西日本海岸

平成5年7月12日午後10時17分に北海道南西沖で発生した地震によって、後志地方や桧山地方の直轄河川の堤防や護岸などが大きな被害を受けました。

震源から河口まで96kmの後志地方の尻別川、67kmの桧山地方の後志利別川の二つの河川で堤防には亀裂や沈下陥没が発生、護岸も同様の被害が発生しました。また、樋門は継手部の開きや断裂、ズレが発生、吞吐口の水路が隆起し装工ブロックが破壊するなどしました。

特に震源に近い後志利別川では、河口から上流約42kmまでの広い範囲での被害となりました。今回は釧路沖の時とはちがい、出水期のまっただなかであることから、発生後ただちに、仮盛り土やシート張り、土のう張り等の緊急応急復旧工事を行うとともに、被災の大きな箇所には、さらに二重鋼矢板による仮締切り堤防を実施しました。現在は、堤防については年内、護岸等についても年度内に完了するべく本復旧工事を実施しています。

河川毎の被害は、次の表のとおりです。

河川名	箇所数	被害延長(km)	備考
尻別川	6	2.9	護岸、樋門を含む
後志利別川	36	9.7	護岸、樋門を含む



■平成5年北海道南西沖地震にかかわる被害状況

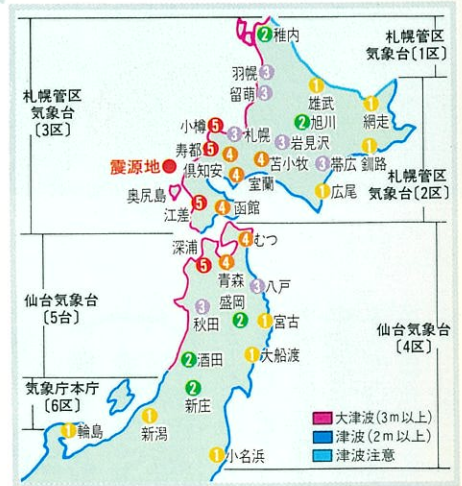
人的被害	死亡者	200人
	重症傷者	236人
	行方不明者	38人
住宅被害	全壊	558棟
	半壊	247棟
	一部損壊	2,191棟
	床上浸水	217棟
	床下浸水	135棟
	火災	300戸

※北海道南西沖地震災害対策本部まとめ(H5.8.3現在)

緊急復旧完了状況
兜野橋下流左岸



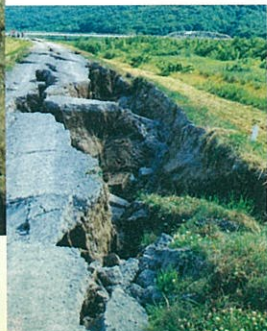
後志利別川北桧山町真栄橋上流左岸
上流方向を見る



北桧山町兜野橋下流左岸
下流方向を見る(西兜野排水機場)



尻別川初田橋上流右岸



北海道の川づくり

暮らしを潤す、 自然豊かな「川づくり」へ

豊かな自然と調和した川づくり、暮らしと川とが密接につながったと実感させる川づくり、この目標を目指して、道では今、川づくりのスタートラインについたところです。

治水対策にウェットをおいてきた従来の「河川改修」からこうした「環境」の視点をも取り込んだ質の高い「川づくり」への転換が少しずつ具体化してきています。もちろん私たちの前には多くの課題が立ちはだかっています。調査、計画、実施から維持に至るまで、これまで積み上げてきた手法そのものを一つ一つ見直していく必要があります。そのため試験、研究や、境界を接する他領域の分野の

人々と従来にも増して一層連携、交流を重ねていかなければなりません。またこうした川づくりを支えるためにはあらゆる機会を通して社会各層、特に日常的に川と接する機会を持つ住民の積極的な協力と理解を得ていくことが大変重要性を帯びています。地域の人々の川づくりへの参加のあり方を探ること、このこともまたこれからの川づくりの方向を確かなものとしていく上での大きな課題となります。

北海道ではこうした課題を取り組んでいくものとして次のような施策を展開しています。

多自然型川づくりの 一層の推進

道内には農村を流れる川、樹林に囲まれた川、蛇行し瀬や淵などが見られる変化に富んだ川が多く残されています。こうした川の整備にはまず保全する事の可能性を、次に整備によって失われてしまう自然があればその回復のための方法を探ることから、着実に検討していかなければなりません。また街の中には緑が失われ、水質も汚れてしまっている川も少なくありません。この様な川をどのようにして生き生きとしたものに変えていくかが多自然型の川づくりのテーマになります。

札幌市の精進川では両岸を積みブロックで固めた近寄り難い単調なつくりの川を緩やかな勾配に変え、自生している樹木を極力残し現地にある石や埋もれ木、取り除いたブロックなどを再利用しながら、岸や水辺に変化をもたせた川づくりを進めています。変化のある水辺や水深は水の中の生き物たちの生活の幅を広げ、岸辺から突き出た埋もれ木は鳥たちの止まり木になるかもしれません。恵庭市の茂漁川でもコンクリートの三面張りの小さな川をゆったりとした川に作りかえています。護岸を張るときにはこれまで伐採していた樹木もできるだけ残すような工夫も生かされました。沼田町の沼田奔川では直線化しようとしていた改修を現在の蛇行を生かすように見直したり、幕別町の旧途別川のように豊かな自然の残されている水辺を保全するため、築堤だけを盛土した事例もあります。

事例に挙げた川はそれぞれ川の特性を生かしたのと言えますが、道内のとくに市街地の川ではこうした川づくりが非常に困難であることも現状にはあります。しかし限られた条件の中でどこまで実現できるのかを考えたうえで、小さな工夫やより効果の上がる工法の研究などにも全道の各地で取り組んでいます。

▲精進川



▲茂漁川

1年経過



(施工中)



フィッシュウェイ整備事業 (魚道整備)の取り組み

遡上し降下する魚たちが住むことのできる川として、既設の落差工などに魚道を設置する事業ですが、今年から施策の一つに挙げ取り組んでいます。札幌市の厚別川では11基の落差工に魚道をつけ下流から上流まで魚達の行き来できる川を目指しています。魚道にもその川の特性を引き合わせなければ設置した効果が期待できない場合もあり、このため道の「多自然型川づくり研究会」の今年の研究課題として取り上げ、議論を進めています。

汚濁の進んでいる 河川浄化の取り組み

汚泥の浚渫などの浄化対策についてはこれまで取り組んできましたが、下水の整備など汚濁の源を絶つ対策と同時に進むなければ効果は一時的なものにしかありません。しかし最近では愛護活動などを通して、身近な川の水質に大きな関心が向けられてきたおり、汚れた川を改善しようという人々の機運は高まってきています。今年度からスタートした道の「クリスタルリバー作戦」はこうした声に応えていこうとする施策の一つです。特に水質ワースト1となった釧路市の春採湖を

地域の暮らしと川が 密接につながっていると 実感される川づくり

街づくり、村おこしなど地域が取り組む各種のプロジェクトを支援し地域の活性化に結びついていく川づくりを目指しています。また近くの川が身近なものと感じられるための施策として河川愛護活動を支援するラブリバー制度の普及に努めており、今年新たに歌登町の北見幌別川が道の6番目の川となりました。この他、川の名の由来を記した河川標識を設置することを今年からはじめており、まず70河川を予定しています。北海道のほとんどの川の名前がアイヌ語からきており、その意味を知ることによってその川への思い起こすことができます。川の歴史を知ることでも川を身近に感じる一つの方法と考えています。

川を通して暮らしに豊かさとするおいを提供することが私達の進める川づくりです。

フィールドにした浄化実験では、廃タイヤから得られる活性炭や身近な飲料容器、プラスチック材料などを使って浄化の効果や効果の継続期間などを調べています。その結果をこれからの浄化対策に生かしていこうとするものです。



札幌市の川づくり

都市小河川改修事業

安春川改修工事

「清流復活による良好な川づくり」

安春川の現状と 環境整備の経緯

安春川は札幌市北西部の新琴似地区を北に流れ、発寒川・茨戸川を経て石狩川に流れ込む都市河川です。安春川は明治23年、湿地帯の地下水位を下げ農地としての利用を図る目的で、屯田兵により掘削された人工河川で、地域の発展に大きく寄与してきました。

しかし、1世紀を経た現在、急激な都市化の進展や下水道の敷設などによる地下水位の低下等により、近年の安春川は流水も枯渇し降雨時のみの排水路に化し、ゴミの投下などにより河川環境の悪化が進み、また、コンクリート三面張による改修であることも伴い殺風景な河川となり、地域の人々からかけ離れた存在になっておりました。

このような背景のもと、地域から歴史性のある安春川に対し、環境整備を強く要望されたことを受け、札幌市では昭和63年から平成3年度まで、上流の800m区間について治水整備と併せ環境整備を実施してきましたのであります。

整備の内容

安春川環境整備の事業手法は、治水と地域の生活環境の向上に寄与する整備を一体的に進める河川改修として、国（建設省）が昭和62年度に創設した「ふるさと川モデル事業」により進めてきたもので、創設と同時に



▲開拓当時の暮らしを偲ばせるモザイク画



認定を受け、全国に先駆け着手した事業であります。

環境整備については、「清流を復活させ、やすらぎとふれあいの水辺づくり」を方針として、周辺の地域づくり計画のもと、他事業と共に親水性に富んだ都市の「アメニティ空間」



▲改修前（昭和63年）



▲遊歩道のところどころにあすまややベンチが設けられている

形成を行ってきたものです。河川空間の具体的な整備としては、高度化した下水道処理水を清流水として復活させ、この清流（せせらぎ）をベースに各種の親水施設を設けております。さらに、河道の両岸に整備した遊歩道は「先人の苦勞を偲ぶプロムナード」と位置付け地域の歴史を表すと共に、都市内に良好な自然環境が創出されるよう緑化を積極的に行ってきました。

また、関連事業として、河川沿いに雪対策を目的とした流雪溝の設置、沿道のコミュニティ道路整備、及び上流排水路は当事業に連続した水辺空間整備を同時に行っております。

資源の有効利用の観点から、下水道処理水を利用して良好な水辺空間整備に取り組んできましたが、完成後は地域のシンボルとして市民に喜ばれております。

整備の諸元等

- | | |
|----------|--|
| 1) 河川の概要 | <ul style="list-style-type: none"> ■河川名/石狩川水系安春川（一般河川） ■流域面積/4.24km² ■延長/4.7km |
| 2) 環境整備 | <ul style="list-style-type: none"> ■事業名/都市小河川改修事業安春川改修工事（ふるさと川モデル事業） ■整備事業/810m ■実施年次/昭和63年度～平成3年度 ■主な整備/ <ul style="list-style-type: none"> ・親水広場の設置 ・低水路（親水性に配慮した自然石による） ・遊歩道（スロープ式の散策路） ・開拓時代の文化、歴史に配慮したデザイン類の利用 ・休憩施設（あづまや、パーゴラ、ベンチ等） ・緑化（高・中・低木、芝生など） ・魚溜まり（魚類の生育環境への配慮） |
| 3) 他事業 | <ul style="list-style-type: none"> ■アメニティ下水道モデル事業（せせらぎ用水の送水） ■水緑景観モデル事業（上流排水路の水辺空間整備） ■流雪溝事業（河川環境の保全、雪対策） ■コミュニティ道路事業（河川沿道の整備） |

川を活かした町づくり

渡良瀬遊水地 アクリメーションランド 構想 全2回 後編

財渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団



1, 水のゾーン

将来計画～第2調節池

2, 土のゾーン

将来計画～第3調節池

3, キャンピングゾーン

キャンプ、パーティー等の野外活動の場です。

4, 草原ゾーン

現状の自然を残すとともに、野鳥、水鳥、魚、昆虫、植物の保全の場です。

5, 自然観察ゾーン

バードウォッチングや植物、昆虫などの自然観察を楽しむ場です。



■各種イベントの実施状況

- 花火大会(8月上旬)～平成3年は25万人の観客(貯水池と古河市同時打ち上げ)
- マラソン大会(10月下旬)～平成3年は2,118人の申し込み(平成2年は1,880人)
- このほか、平成4年からは、自転車ロードレース、ラジコンヨットレース、クイズウォーキング、ウインドサーフィン、バルーンなどの大会や、コンサート、シンポジウムを開催しています。

6, スポーツゾーン

広大な大地と新鮮な大気のなかでスポーツに汗を流します。施設運動場、テニスコートなどを活用し、さらにスポーツレクリエーションに対応できる施設を配置。



7, 親水多目的ゾーン

湖に面した各種イベントのできる水辺と広大な芝生広場。治水利水の啓蒙の場でもあります。



8, 子供広場ゾーン

自然観察、史跡めぐり、スポーツ等に親しみながら、子供たちが自然に触れ、自然の中で自由に走りまわれる場です。



9, 史跡・保全ゾーン

渡良瀬遊水地化計画にともなって廃村となった谷中村の遺跡を保全(450戸、2700人との記録)し、旧谷中村住民の苦難や足尾鉍毒事件に文字通り生命をかけた田中正造翁の遺徳を偲ぶ場として整備。



10, 湖ゾーン

湖に親しみながら、水上スポーツを楽しむ場を提供します。



各湖面の利用形態について

- 〔北ブロック〕 ウインドサーフィンやカヌーなど、多目的に一般利用ができます。(釣りは禁止)
- 〔谷中ブロック〕 エサ釣り堀区域。
- 〔南ブロック〕 ルアー・毛ばり堀区域。200m以内の区域では、漕艇区域としても利用が可能です。

※ボート等は日々持ち込み、持ち出しとし、放置、係留は禁止です。

※モーターボート、ジェットスキーなどは禁止です。

幾春別川新水路事業▶

幾春別下流域及び旧美唄水系は、低平かつ、泥炭性軟弱地盤帯であるため、昭和50・56年の大洪水を含み、過去に幾度も被害を受けた洪水常襲地帯でした。

この解消を図るため、抜本的な治水対策事業として、平成3年度に当事業に着手しました。

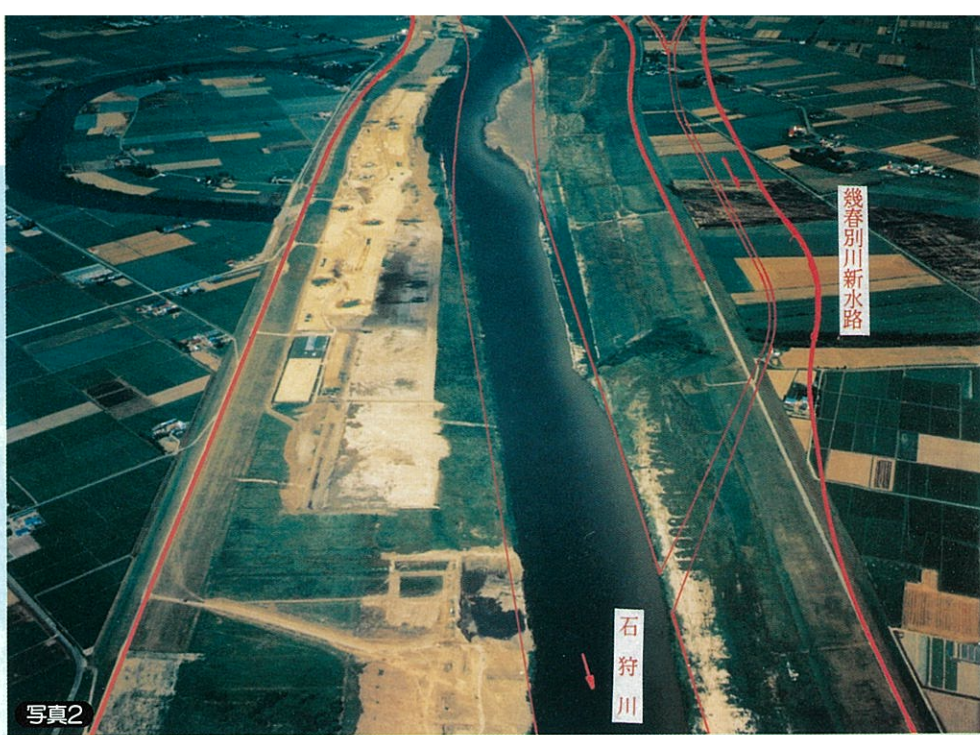


写真2

■消流雪用水の確保の可能な河川から市街地を流れる中小河川に用水を流下させるための導水路を整備し、冬季の生活環境の向上を図るため、後志利別川(北桧山町)、石狩川上流(旭川市)、幾春別川(岩見沢市)で消流雪用水導入事業の整備を進めています。

■魅力ある町づくりを支援する「桜つつみモデル事業」を石狩川(滝川市)等で、「緑の回廊事業」を札内川(帯広市)等で推進しています。

(2.ダム事業)

■洪水調節とともに、住民生活の向上等に必要な都市用水を確保する、沙流川総合開発、滝里ダム(写真4)、忠別ダム、札内川ダム、幾春別川総合開発、留萌ダムの建設を推進しているほか、夕張シューパーロダムの調査を進めています。

■鹿の子ダム等において湖水と水辺空間の有効利用等を図るダム周辺環境整備事業を実施し、地域活性化を推進しています。



写真4

(4.海岸事業)



写真6

■侵食が著しく背後に重要な地域を抱える胆振海岸において人工リーフの建設等海岸保全施設の整備(写真6)を推進し、地域の活性化に資する良好な海岸環境の形成に努めています。

(3.砂防事業)



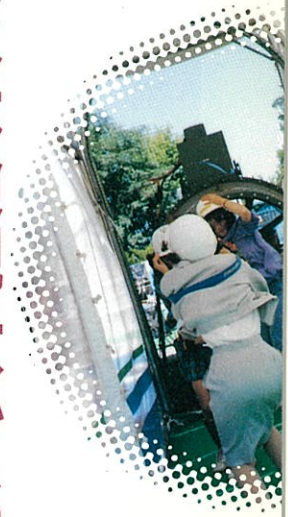
写真5

■火山砂防及び火砕流による災害を防ぐため十勝岳において火山砂防事業対策(写真5)を進めているほか、樽前山において火山砂防の調査を実施しています。

■住宅、宅地基盤の整備に資する砂防、水と緑の創出に配慮した砂防を重点に豊平川、十勝川、石狩川上流で推進しています。



親水体験親子バスツアー (石狩川上流)



▲水と光のファンタジー



▲観覧車による歴史体験コーナー



▲川のQ&Aコーナーにて

思い出の親子バスツアー

砂川市立北光小学校五年 吉中明菜

まちにまった親子バスツアーの日がやって来ました。ウキウキしながらバスに乗り、窓から景色を眺めると、山や川、めずらしい建物などがありました。

最初の石狩川治水学習館では、雨ガッパや傘をさして、日本一の雨や道内一の雨などを実際に体験する事が出来ました。日本一の雨が、やっぱりすごいなあ、と思いました。傘がいまにも、穴があいてやぶれそうになったからです。それに強風体験では、ヘルメットとゴーグルをつけて強風を受けました。必死に足で地面にふんばりましたが、すぐ吹き飛ばされそうになりました。台風などの災害の時は、恐ろしい事になるのだなあ、とつくづく思いました。台風の恐ろしさがつたわつてくるようでした。

カワセミの話の聞いたり、もつとも楽しみにしていた、いかだ下りも見学に行きました。おもしろい形のいかだや、きれいないかだがたくさん出

親水体験親子バスツアーに参加して

旭川市立神居東小学校六年 坂本瑠衣子

八月二十二日(日)に、私は「親水体験親子バスツアー」という行事に参加しました。

始めは、砂川オアシスパークを見学しました。オアシスパークは、まだ、工事中で、出来るのは、10年ぐらい先だということです。私は、まだ未完成なオアシスパークを見て、一つの施設を造るのに、すごく時間がかかるんだなあと思います。また出来るようになったら遊びに行きたいと思いました。

次に見学した所は、流れのプラザです。川を利用して、川の上に公園を造るといいう、日本で初めての試みと知って、旭川より小さな都市なのに、日本で初めてなんてすごいなと思います。旭川にもぜひ造ってほしいと思いました。

次は、道立子どもの園に行きました。でもそこは何回も行っての所なので、中は全部知っていると、感じがしたけど、同じ学校の仲のいい友達と、いっしょにお昼ごはんを食べて、いっしょ

●優秀賞
砂川市立空知太小6年 橋本 千穂
砂川市立砂川小6年 大山 道子
旭川市立知新小4年 八乙女 慶
旭川市立緑が丘小6年 朝光 優子



砂川市立北光小5年 吉中 明菜

旭川市立神居東小6年 坂本 瑠衣子

●大賞
●作文の部
親水体験親子バスツアーに参加していただいた方々からの感想作文、写真は、審査の結果、次のように大賞、優秀賞が決定いたしました。

■写真の部

●大賞
砂川市 早川 久江
旭川市 前田 明美

●優秀賞

砂川市 中西真奈美
砂川市 伊原 哲
旭川市 山田 泉
旭川市 菅原 京子

毎回好評の親水体験親子バスツアー。今年も2回に分けて実施されました。第一回目の石狩川上流コースは8月8日(日)砂川市内の小學校5、6年生とその父母80名で、晴天の中、砂川市役所からスタートしました。バス2台に分乗した一行は、鷹栖インターから旭川市内へ入り、常盤公園に隣接した石狩川治水学習館(川のおもしろ館)へ。川の持つ様々な要素を近代的な設備で体験できる各種ゾーンをまわりながら、石狩川の治水について学びました。

ツアーはその後、秋月橋のカワセミ営業護岸、常盤公園を巡り、十勝岳へ。3D劇場・ポルカニックビジョンなど臨場感溢れる火山活動を体験できる火山砂防情報センターへ到

活動報告

館内をたっぷりと見学し、シエルター内からのぞく渓谷を楽しみながら、砂防ダムのみ近へ接近。壮大な規模で展開するダムについての説明を職員からうかがい、子供たちからの質問も飛び出すなど、充実した一日に参加者も満足な笑顔を浮かべていました。

また、第2回目の8月22日の石狩川中流コースは、旭川市内在住の小学5～6年生とその父母80名により、8月8日のツアーと交流交換するかたちで行われました。旭川から砂川へ、一行は、砂川オアシスパーク・流れのプラザを見学した後、道立子ども園で元気いっぱい遊び、北光公園でヨットやカヌーに試乗するなど、盛り沢山の内容に、歓声をあげていました。

滝川市西滝川の石狩川沿いの「川の科学館」が本年度より財団が管理・運営の委託を受けることになり4月29日オープンしました。

当日の開館式には、滝川市長や石狩川の会代表の方々、また滝川市立西小学校の児童とその父兄の皆さんなど、多数の来賓の方々により、館名碑の除幕式がとりおこなわれました。

セレモニーは、石狩川開発建設部長から財団専務理事への「鍵」の交付、堂垣内会長のあいさつ、来賓の方々からのご祝辞のあと吉岡理事長のお礼のあいさつなど、大変なごやかな雰囲気の中、執り行われました。

「川の科学館」は北海道最大の大河、石狩川を、最新設備を配して総合的に科学することで理解を深め、より身近に感じてもらおうことをテーマにしています。

当日、式典に参加された方々も実際に科学館を見学、充実した設備や、川の様々な表情に触れ、大変満足された様子でした。

て来て、とても楽しかったです。なかでもジリグヤウルトラマン等が、印象に残りました。広々とした川をいかだで下って行くのは、どんなに気持ちがいいだろうなあ、と思いながら見ていました。また、昼食の時にはお腹がすいて、お弁当を残さず全部食べてしまいました。砂防情報センターでの見学もとても勉強になりました。十勝岳は、雄大ですごいと思いました。自然を守ろう事の大変さを知りました。帰りのバスの中では、〇×クイズをしたりして、とても楽しかったです。

親子でバスツアーなんてする機会がめったにないので、参加してよかったです。色々な事も覚えたいし、楽しい思い出も出来ました。もう一度このような機会があったら、ぜひ参加してみたいです。最後にこのバスツアーの思い出は、いつまでも大切に心に刻んでおきたいです。

に遊んで、とてもおもしろかったです。

そして、最終目的地の北光公園では、カヌーに乗りました。砂川に、こんな所があるなんて知らなかったの、びっくりしました。ヨットもあつたけど風がなかったの、モーターボートで引っぱっていました。だけど、風のないおかげで、カヌーに乗っていても、風で落ちることはありませんでした。カヌーは、こごとなぜか、ぐるぐる回ってしまつて、なかなかまっすぐには進めません。それに、足はがにまたにしていなきゃならないのでつかれるし、雨も降っていました。だけど、とってもおもしろかったので、また来たいと思っています。

このツアーで、今まで、なんとも思っていなかった川のことを、たくさん学び、たくさん体験して、とってもためになり、とってもおもしろかったです。



▲除幕式

「川の科学館」 OPEN。



◆石狩川振興財団の

詩・幻想天の河
原子 修(はらこさむ)

1932年北海道函館市に生まれる。札幌大学教授。北海道学芸大学函館分校一類文科を卒業。詩人。日本現代詩人会員。北海道詩人協会理事長であり、札幌大学教授、北海道大学非常勤講師も務める。北海道詩人賞、北海道芸術新賞、北海道文化奨励賞、札幌市民芸術賞を受賞。

主要著書「原子修詩集」「大白鳥」

編集後記

○平成5年1月の釧路沖地震被害で釧路川・十勝川で復旧に多忙を極めている中、7月には北海道南西沖地震が発生し、後志利別川・尻別川が被災しました。

○上川地方の渇水、北日本の冷害による不作など暗いニュースが続き、九州では土砂災害が多発し台風発生のためにこんどは石狩川かと56年災を想い神経をとがらせます。

○ミンシツビ川も6月からの大水で史上最悪の被害とか、本文「紀行」で紹介された地方も3ヵ月も泥水の中とは想像しがたいものがあります。

○千歳川流域人口30万人、毎年毎年今年ほもしやと心配し、シーズンが過ぎると胸をなでおろす繰返しは、安全な社会基盤には程遠いといえるのではないのでしょうか。

水と緑豊かな生活環境、うるおいのある美しい水環境は安全の下にまもられるのです。千歳川放水路の一日も早い着工が果たれます。



シマフクロウ

フクロウ科

繁殖地は極北のツンドラ地帯。わが国には、北海道へ年により少数が冬に渡って来ます。フクロウのなかではめずらしく雌雄異色で、ふつうつがいが一羽で生活します。昼間も狩りをし、えさのネズミ数により個体数が増減します。